

## 吉屋 敬 《この頃・色々 (2011年)》

### 日本で遭遇した大地震

私は2月下旬から日本に帰っていました。いつもこの時期には仕事を兼ねて一カ月ほど帰国するのが、最近は恒例になっています。

3月11日の午後、自宅から歩いて15分ほどの距離にある眼鏡店に行きました。ちょうど眼鏡店で検眼を終えて眼鏡を注文している時に、突然店内の電気がパッと消えてしまいました。本能的に危機感を覚えて、私はとっさに外に飛び出しました。激しい揺れが襲ってきたのはその直後です。近辺のビルや建物からは人がぞくぞくと外に出てきて、道路は瞬く間に人で溢れてしまいました。私は眼鏡店の横にある小さな駐車場に避難しましたが、周囲の5、6階建てのビルがぐらぐらと左右に揺れています。このままビルが崩れたら下敷きになってしまう、と思うと私は大きな恐怖に駆られました。

かなり長く続いた地震は収まったと思うとまた揺れだし、続けて三度襲ってきた揺れはとても長く感じられました。最初の地震の揺れが続いているのか、新たに襲ってきた大きな余震なのかは全く判断が付きません。私は、ついに恐れていた東海大地震に帰国中に遭遇してしまったかと思ったくらいです。

やっと揺れが収まったのですぐ近くの鶴見川の堤防に上ると、堤防も人で溢れています。川にかかる大綱橋という橋を渡って自宅に向いましたが、橋の上は信号が止まってしまったため車やトラック、バスがぎっしりと詰まっていて動きません。救急車やパトカーがサイレンを鳴らしても身動きも取れない状態です。橋と並行して走る東横線の線路にも、電車の影はありませんでした。

帰宅してテレビの報道でこの地震のすさまじさを知った私は、心から戦慄を覚えました。揺れの長さは3つの相次いだ地震のせいだということが分かりましたが、テレビを見ている間にも震度4くらいの余震が次々に襲ってきます。やがてテレビにはすさまじい大津波の様子がライブで映し出されました。先端が黒く見える不気味な津波が海上の船を軽々と持ち上げて陸地に運び上げ、車や家を次々と巻き添えにして内陸部に進んで行く映像は、全世界を恐怖に陥れた9・11の映像を上回るほどの恐ろしさでした。翌日になってから、今度は津波で被害をこうむった福島第一原発の深刻な事故のニュースが流れ始めました。原子炉の建屋が水素爆発で吹っ飛んだというニュースでしたが、この時点で私は、今回の災害が日本全体を巻き込んだとんでもない大災害だという認識を新たにしました。

地震の影響は我が家ではほとんどなく、壺が一つ棚から落ちて割れただけでしたが、被災地の人たちはかつて日本が経験したことのないような破壊力を持った三つの災害に次々と襲われたのです。連日テレビに映しだされる津波の被害は海岸線から内陸の深いところに

まで及んで、津波が引いた被災地はるるいた瓦礫の山と化していました。  
生まれてすぐに宮城県登米郡(現在の登米市)に疎開し、8歳になるまでそこで成長した私にとっては、東北は幼少期を過ごした大切な地です。登米市も地震で大きなダメージを受けたと知った私は、広々と豊かな田んぼが広がる悠久の北上平野、はるか遠くにかすむ北上山脈の懐かしい風景を激しい胸の痛みとともに思い浮かべました。幼いころ机を並べた友達やその家族はどうしているのでしょうか。

原発の放射能漏れは、日を追って深刻さをますます増しています。首都圏でも買いためが始まり、スーパーの棚からはパンやトイレットペーパーや水などがなくなっていました。それが不必要かつしてはいけない行為だと重々知りながら、自分自身も同じ行動をしているのです。

私はもともと27日発の便でオランダに戻る予定でしたが、続々と本国に帰るヨーロッパ人のことが報道され、オランダの留守宅からは一刻も早く帰るようとの催促が来ます。欧米人は自国の放射能の被害報道が日本よりずっと深刻なのを知って、一刻も早く避難しようとしていました。

私は報道を見ながら予定の27日まで日本にいるべきか、あるいは一日も早く帰るべきか迷っていました。放射能漏れの報道は、ある日は深刻だと思えば翌日にはまた楽観的なものになるので、何を信じていいか分からず判断がつかず迷うばかりです。しかし、私が一番恐れたのは放射能の問題そのものよりも、27日に予定通りオランダに戻れなくなることでした。4月2日から始まるアムステルダムでのアートフェアに、私も画廊から出展することが決まっていて、3月29日に作品を搬入する約束になっていたからです。

そんな中でいよいよオランダ政府も報道関係者を含めた自国民に退避勧告を出したと聞きおよび、ついに3月15日の時点で私も予定を早めてオランダに戻る決心をしました。

翌日トロリーひとつだけを持って成田に行きました。成田は帰国する欧米人や中国人でごった返しています。結局向こう三日間の便はすべて満席で、予約は不可能でした。しかたなくまた横浜の家に戻り、ネット予約でやっと取れた一番早い便が19日成田発のアリタリア航空ローマ経由でした。その便も翌日には成田発から関空発に変更されるという始末です。関空が大混雑だという情報を受けて、私は乗り遅れることを恐れて前日18日に大阪に行き関空に近いホテルに一泊することにしました。翌朝の関空の出発ゲートは案の定大混雑でしたが、19時半の出発まで空港内で待ち続け、私はやっと飛行機に乗り込みました。

ローマに着いたのは深夜の0時半です。乗り換えのデスクが閉まっているので、出発ゲー

ト内に一軒だけ空いているみずぼらしいカフェで数時間を過ごすことにしました。そこで二人の子供を連れた日本人女性とギリシャ人男性のご夫婦に出会い、一緒に話しながら過ごしました。ギリシャ人の夫はコンピューターの技術者で、日本で働いていたということでした。ところが今回の放射能騒ぎで、インド人のボスが会社を閉じて帰国してしまったのだそうです。それでこの際、一家4人で帰国を決めてローマ経由でギリシャに帰る途中でした。しかし財政危機にあえぐギリシャに帰国しても、すぐに仕事が見つかる保証はありません。暫くは一家四人で親類宅に居候しながら職探しをするという、厳しい現実が待っています。日本で生まれ日本語で育った子供たちも、これからはギリシャで地元の学校に通う生活が始まります。

4時になってターミナルビルが開いたので、私たちは外に出てターミナル1を目指して歩き出しました。途中で外国人の若い男性が日本語で私たちに話しかけてきました。彼は私たちと一緒に飛行機でローマに着いたイタリア人でした。日本で仕事をしていた彼も、やはりこの災害で退職を余儀なくされて本国に戻ってきたヨーロッパ人の一人です。景気がいいとは言えないイタリアで、それも彼が住む小さな地方都市で果たして仕事が見つかるかどうか、彼の語るイタリアでの将来も不安に満ちたものに響きました。彼はせっかく母国のローマ空港には着いたものの、鉄道の駅へ通じるサインも見当たらず困っているということでした。自分の国にいるのに列車の乗り方さえも分からないなんていうことは、日本なら絶対にあり得ないのに本当にイタリアときたら・・・、と言って彼は大げさに嘆いて一人去って行きました。震災の被害と影響は、決して日本人だけに限ったことではなかったのです。ターミナル1で私とギリシャ人家族は別れを告げ、それぞれアテネ行きとアムステルダム行きの乗り継ぎゲートに向かって歩き出しました。

翌朝8時半のアムステルダム行き飛行機に乗れた時は、本当にホッとしました。昼前にアムステルダムに着き、家人の出迎えを受けて自宅に戻ったのは正午を回っていました。3日間の長旅を終え、春まだ浅い北国のホームベースに戻ってきたと思った途端、どっと疲労感に襲われました。

あれから三週間。あの一家とイタリア人青年はその後、どうしているのでしょうか。二度と会うことがない人たちかも知れませんが、私はこの災害を思い出すたびにきっと彼らのことも思い出すに違いありません。

(2011年4月)

## オランダの震災支援バザーで考えたこと

戻ってきたオランダでは、在留邦人たちが各地で様々な方法で支援活動を繰り広げていました。私が名誉会員として関与しているオランダ在住の日本人の女性グループ・JWCが中心となって、支援バザーを企画中でした。私も主宰・指導している油彩画のグループ、イル・マエストロの会員有志たちを誘って参加することにしました。すでに日本にいた時にこの支援活動のことを聴いていたので、ライフラインが切れた日本でなすすべもなくテレビの前に座って不安感を募らせているよりは、いっそオランダに戻って何かしら支援活動ができたほうが良いと考えていたところでした。

メールを通して有志たちと連絡を取り合い、それぞれがどんな分野でどんなことができるか相談し合っていました。だから戻ってきたときには会員全員が協力して、全てがスムーズに進行していました。二人の会員がオランダで描いた思い出深い貴重な作品を、合計7枚も供出してくれました。またある会員は、得意のビーズのアクセサリを沢山作って供出してくれました。また他の会員たちは手造りの和菓子やお饅頭、巻きずしなど、別な会員たちは不用な家具や電気器具、本や衣類等々多数の品を供出することなどで、参加してくれました。寄付参加した会員もいました。イル・マエストロ以外にも沢山のグループや個人がこのJWCのバザーに参加し、みんながそれぞれの得意分野と持ち場を生かして、素晴らしい連携プレーで協力しました。

JWCは近年会員数の減少に悩んでいますが、この母体となる組織があったからこそ、沢山のグループや個人が参加でき、素晴らしい連携のもとに参加できたのだと思います。少人数でこれだけのことを組織したJWCの皆さんに、本当に頭が下がります。

当日はラジオ局やテレビ局が取材に来ていて、私も何回か取材を受けました。地震の翌日、オランダではテレビが日本の災害について大々的に報道したそうですが、その折にオランダ人コメンテーターから、オランダ赤十字社が日本赤十字社への支援を断られたという発言があったそうです。それはあたかも金持ち国日本は海外からの支援なくとも自力で復興できる、というイメージで一般のオランダ人に受けとめられ、日本人コミュニティーが困惑しているという情報が、まだ日本滞在中だった私にももたらされていました。阪神大震災の折にも、オランダの救助犬の派遣を日本の検疫がすんなりと受け入れてくれなかった、というニュースがオランダ人の心象をひどく害した過去の事実もあり、またかという思いでした。その後の報道でも、どこかの国からの支援用の毛布のサイズが日本の規格に合わないので断られたケースとか、受け入れ機関の混雑と混乱で支援をなかなか受け入れてもらえなかったケースなどを聞くと、日本人は何と傲慢な国民だと受け止められても仕方ないような気分になりました。どこかで何かのコミュニケーションギャップで行き

違いが起こっているのですが、日本側の対応のつたなさ、鈍感さには驚くばかりです。

そうした経緯があつてかどうか、バザー会場でのテレビ局のインタビュアーの私への質問はかなり意地の悪いものに聞こえました。「日本は金持ち国だから、お金の支援など要りませんよね？」と否定形で質問してきます。

私は、「経済支援はもちろん必要ですが、今の時点で海外在住の私たち日本人にとって大切なこと、できることは、まず精神的に被災者を励ますことです」と答えました。かなり長々とインタビューされたのにも関わらず、結果的に放映されたのは「大切なことは被災者を精神的に励ますことです」という一言だけでした。

日本は復興に向けて今後膨大な資金援助が必要です。お金はいくらあっても足りないはずなのに、どうしてこんな質問をされ、あたかもお金が要らないと言っているような部分だけ取り上げて放映されるのか、とても残念でなりませんでした。もっともこうした報道の態度とは裏腹に、オランダでは官民あげての支援活動が活発化し、日本人の痛みを自分たちの痛みとして受け止め、沢山の支援金が集まっているのも事実です。

JWC主宰のバザーには1,000人くらいの日蘭両国人が押し掛けてくれて、入場制限するほどの盛況でした。この日の合計売上は16,000(約180万円)ユーロでした。バザーは活気に満ちていて、どの人の顔も興奮で紅潮し、輝いていました。海外にいる自分たちができることを最大限して支援に参加したいという思いで、数日前の準備段階から全員が高揚した気分の中にいたようです。

人間が何か人の役に立てることをしたいと切望している姿を見て、私はゴッホの手紙を思い出しました。ゴッホは生涯売れない作品を描き続けましたが、彼の制作の根底にあったものは、「どうしたら自分が何か善いことができる人間になれるのか、何らかの目的に貢献する人に、何かの役に立つ人間になれないものだろうか、」

と書いたように、人のために役立ちたいという切なる願いでした。この支援バザーで働いた人たちの気持ちは、おそらくゴッホのこの無償の自己犠牲への欲求に通じるものがあつたように思います。ゴッホは没後それを作品で成し遂げました。そしてこの「人の役に立ちたい」という情熱に動かされた沢山の人たちの気持ちと行動こそが、今回の支援バザーを成功に導いたのだと思います。

バザー後、何人かの方からメールや電話でコメントが来ました。成功を喜んでいる人がいる一方で、別な意見もいくつかありました。そうした意見で共通しているのは、一回きりの支援で満足しているなら、それは単なる自己満足に過ぎないのではないか、というものです。本当にその通りかもしれません。で、私はあらためて、何故支援するのか、何故自己満足なのかを自分

なりに考えてみました。

- ① 今回の災害で私たち海外在留の日本人は、直接的な被災を免れている。  
日本人特有(かどうかは分かりませんが)の感情として、自分だけが安全圏にいることへの罪悪感と贖罪意識があり、何かしないとイケないという感情、脅迫観念にとらわれている。
- ② 何かしら支援に参加していることでその罪悪感から逃れられ、かつ社会に貢献しているという大きな自己満足を得られる。

という深層下に潜む二つの感情に集約できるかもしれません。

そしてこれらはどれも非常にノーマルで自然で、人間の持つ優れた感情に思えます。

では、支援がたとえば一回で終わってしまったら、支援の意味がないものなのでしょうか。私は違うと思います。確かにこの支援活動自体は一過性のものかも知れませんが、どのような形で支援が被災者に届くかも不明です。しかし、額は小さいかも知れませんが、確実にそれによって助かる人がいるという事実は変わりません。

この災害が起こる前の日本では、しきりに伊達直人を名乗る怪人(?)が出没し、施設の子供たちにランドセルをプレゼントする行為が流行りました。あの怪人が同一人物なら決して名乗らない態度は立派ですが、これも複数の人たちによる、一過性の行為の流行現象ならば意味がないと思う人もいることでしょう。行政のやるべきことを一個人が代行する必要はないという意見もあるでしょう。でも現実として、行政はこうした施設の子供たちに立派なランドセルをあげる予算と気持ちがあるのでしょうか。困っていると欲しいものは他人がくれる、世の中は甘っちょろい、とか、人から恵まれていやだなどと子供たちは考えるのでしょうか？ おそらく贈られた子供の心には、生涯このランドセルをもらった喜びとそれをくれた人、その行為は記憶に残ると思うのです。

バザーで活躍した在留邦人たちにはもちろん自己満足のためなどという不純な気持ちはなく、誰かの役に立ちたい、人を助けたいというささやかな生きがいややりがいや喜びを感じていたことは確かです。そしてたとえこれが一度だけの自己満足に終わったとしても、私は十分に意義があったと考えています。支援するということ自体が、『自己満足という自己セラピー』の行為なのだと思うのです。「人を助けている、何か善いことをしている」という意識が、人間の一人として社会に参加し貢献しているという感動と喜びを与えてくれているのだと思います。この「無意識の自己セラピー」がなければ支援活動はただ苦しい義務に感じられるだけで、一個人として支援活動にあれだけ熱心に、輝いて取り組むことはできない様に思います。

バザー会場入り口で辛抱強く入場順番を待つ多くの人たち



チャリティー・バザーに集まった人たちや報道陣を前に挨拶するアムステルフェーン市長



大繁盛のバザー会場



アムステルフェーン市恒例の桜祭りは、今年は東日本大震災犠牲者の追悼行進に変わった



桜並木の下に設置された東日本大震災犠牲者への追悼の言葉と献花

## 具象芸術展『リエゾン・アムステルダム』"LIAISON AMSTERDAM" と私の新作について

4月2日(土) から10日(日) までアムステルダムの会場で、リエゾンと呼ばれる具象芸術のアートフェアがスタートしました。これはオランダとベルギーの具象専門画廊が4軒で共催するフェアです。私はオランダのブラバント州ニュネンにあるポナール画廊の代表作家の一人として、新作一点、既発表作品二点で合計三点を展示しました。

新作は「Rainbow」と名付けた三連画、110×200 cm の作品で、私が今まで40年以上にわたり一貫して追ってきたテーマであるルネサンス風の大気の中で、ブランコを漕いでいる一対の男女の姿です。



2010-2011年制作三連画 <Rainbow> 『虹』 Triptych [110 x 200 cm; Acrylic on canvas]

描かれている空間は、時代も場所も不明の遠方に古代の山並みの見える田園風景の中です。ブランコはあってもそれを支える支柱はありません。二人はあたかも天から降りてきたブランコに乗っているように、あるいは空中を揺曳するかのよう、あるいは飛翔しているかのようにブランコを漕いでいます。この非現実的世界をさらに強調しているのは、彼らのまとう一見古代風、また一見現代風のちぐはぐな衣装、そして顔の半分を覆う仮面とも思える白い化粧です。

コレクターの一人が来場して言いました。

「吉屋さんの作品の前に立つと、何となく登場人物に話しかけたくくなります」



これは私にとってとても嬉しいコメントです。何故かというと私のテーマの一つは、いつも対話と交流だからです。キャンパスの登場人物同士は一見無関心に見えますが、必ず彼らを結び付けている共通の何かが見つかるはずです。この画面では女から男に向けて飛んでいく鳥の群れであり、また男から女の側にかかる虹に二人のかかわりが凝縮されています。後方には彼らが共有している空気が行き交い、足元には同じ古代の連山と原野が広がっています。こうした懐かしい風景の中にある一対の男女は、観客にも話しかけているのです。無表情に見える白い化粧の奥にある目は決して無関心な目ではありません。観賞者は作品の前で彼らと様々な会話を交わしますが、その時々のお話の内容や気分によって、彼らは表情を変えてくれることでしょう。

最初に私は男女のいる両翼の二連を描きました。出来上がってくる作品を並べて見ていると、まるで二人の漕ぐブランコが私に向かって迫ってくるような圧迫感を覚えました。それで両翼が完成した直後に、真中に幅を半分にした細長い風景の画面を足すことにしました。これによって画面に空間が生まれ、ブランコを漕ぐ男女から受ける圧迫感がなくなりました。観賞者の目と心にもきっとゆとりが生まれ、思考が広がってくれるのではないかと思います。

会場には様々な画風や実験的な作品も並んでいます。具象だからと言って、必ずしも分かりやすいわけではありません。具象、抽象の堺にある作品もありますが、芸術そのものの思考は抽象的なものですから、うわべのスタイルだけを見て具象、抽象と色分けするのも意味がないように思えます。芸術は人を慰め、力づけ、鼓舞する力を持っています。ある時は挑戦、挑発することもあります。そうした作品を前にして、観る人の思考は刺激されて大いに活発になることでしょう。今回の出展作品にも色々な画風がありますが、目に心地よいものだけがアートなのではなく、知的思考を刺激されるという面からアートを観賞されると全身の神経を総動員させることでセラピーになりうるものだと思います。

(2011年4月 吉屋 敬)

